

其日庵再記

庵主が斯界初めての試みに懸る「義太夫節の風格」を「攝津大掾、大隅太夫、名庭絃阿彌」等より聞込んだ記憶を探りて數十段書綴つたのは庵主が老衰死に直面して書かざれば死と共に消滅して仕舞ふと云ふ暮鐘の聲に驚かされた所作であつた、元々多少は調査をした材料もあつたが夫も癸亥の震災にて全部焼失して仕舞ふたので申さば只だ記憶を基礎としたる腰グメの執筆であつた事は序文にも書いた通りであるから年月、作者、役場、太夫等の穿鑿は多くは耳を専門として目で調ぶる事は出来なかつたのである併し此丈けの記憶丈けでも書残して置けば斯道に熱心なる篤志家が、夫はそふでない、是はこうである、と訂正して呉られる事は當然であると思ひ即ち此著述は非難攻撃の材題として夫を最大の満足として豫期したのである所が發刊數日ならずして庵主が幼少よりも愛護した某太夫は數日徹夜して此杜撰の書物を讀んで一々其間違を訂正し、之に一切の證據物件を揃へて送り越して呉れた此の太夫は現代日本に於て一番義太夫節に對する參考書を澤山に集めて居る藏書家の巨擘である其人が斯くまで熱心に調査して呉れやうとは全く思ひも寄らぬ厚意である

此は單に庵主の幸福のみならず本書を読む讀者一般の幸福である喻へば「鎌倉三代記」の如き享保年中の作にして越前掾の語風であると書いて居るのに某太夫は「安永の書下して氏太夫の語りた役場が現在に語りて居る三代記である」事を調べ出して警告して呉れたのである故に庵主は茲に明言する「本文に書いたる「三代記」の事は庵主の書いたのは單に記憶の腰ダマで書いた物であつて此某太夫の警告の方が全く正確である」と而して其語り風は庵主が之を「越前風で大隅から習ふた事」は又事實であるが序文に書いたる如く「攝津大掾、大隅太夫」より聞いたる事も後年「名庭絃阿彌」に調査させて見れば其兩者の口傳記憶に相違のありし事は二三にして止まらなかつた故に此「氏太夫の三代記」を何時頃にか誰か「越前風」に手を付けかへた物を「大隅に團平が稽古したもの」と思はるゝのである、夫は丁度「宮守酒」を團平が「駒太夫風」に手を付けかへ又「島太夫風」の「伊勢物語りの三段目」を何時の頃にか「土佐太夫風」として世に流行はやらせた類と同じ事と思ふのである、兎も角此某太夫の調査親切なりしが爲めに「伊勢音頭や、朝顔、明烏、其他數段の出所不明なりし物」等までが總て鮮明して來たと云ふ事は庵主の喜び此上ないのである、庵主は尙此上にドシく此種の訂正が八方より來りて此書の真相が完全に近づく事を切に希望して止まないのである、

故に今、某太夫の書面の全文を左に掲げて置くから讀者はよく本文を照合して研究せられんことを切望するのである。

某太夫の書簡

第壹信	大正十五年十一月十七日……………	六
第貳信	大正十五年十一月廿二日……………	三
第參信	大正十五年十一月廿二日……………	六

第 壹 信

……只今も御本を日々拜讀いたして居り升が丸本及び皆語り居り升るは

楠の三ノ口

『婆々は六十のみつハくむ』と語つて居り升が

御本には

『水くむは』となつて居り升、是は旦那様がおかゑになりましたので御座りますか。

布引三ノ切に、

『某元そともとは源氏の家臣』、かながまちがひ居り升。

重の井子別に、

『ござろふとおつしやるは、こりや目出度』是も丸本には、

『おつしやるか、ソリヤ目出度ハく』と書いて御座り升すが如何で御ざりませふか。

廿四孝十種香に、

「臥戸に入る月の。渡り頼まん船人」は。チクリ「ふし戸へ行水の。水海船人に、渡り頼まんいそがんと。

關取千兩幟に、

「ヤア〜土俵入で御ざります」は。

「モウシ〜」。

「羽織脇さし衣まわし、酒は松ばへ」は。丸本には、

「とりまわし」。『杉ばへ』。

三日太平記九、

「察じ入たる」は、

「案じ入たる」。

外に「周防町平右衛門」がスワ町平衛門となつて居り升。

竹本と豊竹とのまぢがい。

清水町を新町の師匠。是がたくさんにまぢがつて御ざります。

明烏の所に、

四代目竹本綱太夫と御ざり升が、是は六代目で御ざります。

書下し當時の番附太夫役割を寫し中に入れて御ざりますゆへ御笑覽願上り。

朝顔は御本に、

嘉永三年戊正月として御ざりますが、

天保三年に新作興行。

生寫朝顔話		天保三年辰正月二日初日稻荷社内ニ於テ 新淨瑠璃 太夫役割
大序	大内館之段	
序切	松原之段 宇治川之段 茶店之段 岡崎之段 明石船別之段	
切口	跡 奥 口	
	佐賀太夫改メ	
	竹本志那太夫 竹本芝太夫 竹本國太夫 豊竹湊太夫 竹本中太夫 竹本理太夫 竹本久太夫 竹本重太夫	

跡	五段目切	四段目切	三段目切	二段目切	弓之助屋敷之段
多々羅ヶ濱之段	胸澤閑居之段 山岡屋敷之段	島田宿 宿屋之段	摩耶ヶ嶽之段 濱松小家之段	大磯揚屋之段 小瀬川之段	
合ヶカ	切	口	切	口	口
					江戸住太夫事
竹本力太夫	竹本馬太夫	竹本富士太夫	竹本山良太夫	竹本むら太夫	竹本長門太夫
	竹本久太夫	竹本中太夫	竹本重太夫	竹本谷太夫	竹本頼母太夫
		竹本長門太夫	竹本谷太夫	豊竹湊太夫	竹本内匠太夫
		竹本重太夫	竹本中太夫	竹本むら太夫	竹本長門太夫
		竹本中太夫	竹本久太夫	竹本谷太夫	竹本長門太夫
		竹本重太夫	竹本谷太夫	竹本長門太夫	竹本長門太夫

楚仇討瀧に、

芝居が知れぬと御ざりましたゆゑ書下し太夫及役割。

箱根靈現 楚仇討 十二幕

書下シ享和元年酉十一月三日初日。道頓堀東芝居ニ於テ
座元豊竹吉太郎。各太夫竹本姓。

伏見城之段	式太夫
だいがやみ討之段	頼母太夫
聚樂御殿之段	伊織太夫
黒百合献上之段	曾根太夫
同御殿之段	頼母太夫
くらがり峠之段	津賀太夫
筆助住家之段	式太夫
切	
	越太夫
	内匠太夫
	磯太夫
	式太夫
	津賀太夫
	越太夫

玉藻前増補三段目の書下し當時の太夫役割。是も芝居が知れぬとの事ゆゑ。

鶴ヶ岡之段	曾根太夫
新左衛門屋敷之段	磯太夫
堺天神之段	内匠太夫
阿彌陀寺之段	津賀太夫
敵討之段	瀧太夫
	綱太夫
	總カケ合

繪本増補玉藻前旭袂	三國續十一冊
書下シ、文化三寅年三月二十六日初日。御靈境内芝居ニ於テ	
添作 梅枝軒。佐藤太。	
天竺	しゃむろ山之段
同 麓之段	竹本探太夫
同はん足王御殿之段	竹本澁太夫
	竹本絹太夫
	竹本箒太夫
	豊竹綾太夫
唐土	姐妃入内之段
	切 中 口

日本

同大公望流り之段	同股村王御殿之段	同樓門之段	清水寺之段	道春館之段	神泉苑之段	廊下之段	十作内之段	訴訟之段	いのり之段	奈須野ヶ原之段
口	中	口	口	口	口	口	口	カケ合	カケ合	口切

豊竹泉太夫	竹本塚太夫	豊竹秀太夫	豊竹八重太夫	竹本絹太夫	竹本澁太夫	豊竹綾太夫	豊竹泉太夫	豊竹巴太夫	竹本久太夫	竹本笹太夫	豊竹秀太夫	豊竹太夫	竹本久太夫	竹本綾太夫	竹本塚太夫	豊竹巴太夫	豊竹八重太夫	豊竹秀太夫	竹本澁太夫	竹本咲太夫
-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------

三日太平記 嘉平次住家

書下し當時大夫役割。

景事 化粧殺生石	竹本泉太夫 竹本筆太夫 竹本絹太夫
-------------	-------------------------

三日太平記	
第一 小田別館之段	作者—近松半二。三好松洛。八民平七。竹本三郎兵衛 書下シ—明和四亥年十二月十四日初日。竹本座ニ於テ 大夫役割全部竹本姓。
第二 道行之段	
第三 桃山之段 松永館之段	
第四 安土城之段	
與 中 口 跡	
ツレ	
第一 小田別館之段	彦太夫
第二 道行之段	木々太夫 の太夫
第三 桃山之段 松永館之段	組太夫 彦太夫 木々太夫
第四 安土城之段	倉太夫 鐘太夫

伊勢音頭油屋、

此外題も古き天保九年に新淨瑠璃興行

播摩大掾師門人

初代 大隅師(百合太夫改。三根太夫再改)

御存じの通、大和掾の前名は大隅掾に御座り升が、大隅太夫と名乗るは、此師を初代と申升。

第五	本能寺之段	口	奥	口	奥	口	奥	口	中太夫改メ	咲太夫
第六	堺乳守の由來	口	奥	口	奥	口	奥	口	政太夫	組太夫
第七	小田居茶屋	口	奥	口	奥	口	奥	口	染太夫	倉太夫
第八	柴田權六隠家之段	口	奥	口	奥	口	奥	口	烏太夫	の太夫
第九	小栗栖村之段	口	奥	口	奥	口	奥	口	咲太夫	政太夫
第十	嘉平治住家之段	口	奥	口	奥	口	奥	口	鐘太夫	木々太夫
	住吉詣之段	切	中	奥	口	奥	口	奥		

(元治元年甲子年十一月十三日 行年六十八 天保九年に大隅太夫にられました。)

伊勢音頭戀綴又

作者—山田案山子

書下シ—天保九年戌七月二十五日初日、稻荷社内東芝居ニ

於テ

前狂言 一之谷嫩軍記

切狂言 去りし噺の姿下阪十人斬の大座敷

伊勢音頭戀綴又 上、中、下

上之巻	松原之段	口	中	口	豊竹巴磨太夫
中之巻	十内住家之段 福岡屋敷之段	口	奥	美咲太夫改メ	竹本越太夫 竹本勢見太夫 竹本三根太夫
下之巻	二見ヶ浦之段 古市油屋之段	中	跡		竹本叶太夫 豊竹島太夫 竹本大隅太夫
	奥庭之段	跡	切		カケ合

忠臣講釋の書下しも寫しまして入れて御座り升、

<p>太平記忠臣講釋</p> <p>書下し—明和三年戊戌十月十六日初日、太夫全部竹本姓</p> <p>役割</p>	
第一	鎌倉御所之段
第二	伯州域中鞘割之段
第三	九太夫切腹之段
第四	白川村之段
第五	道行
	揚屋之段
	ツレ
	カケ合
	倉太夫
	咲太夫
	和佐太夫
	綱太夫
	組太夫
	住太夫
	三根太夫
	染太夫
	鐘太夫
	和佐太夫
	鐘太夫
	綱太夫
	咲太夫
	倉太夫

第六	辻君之段	彦太夫 吹太夫
第七	喜田住家之段	島太夫 組太夫
第八	大星出立之段	鏡太夫 住太夫
第九	元川屋捲問之段	島太夫 染太夫
第十	敵討之段	彦太夫

三角様から正誤表が参りました、拜見いたして居り升、まだだいぶ活字のまちがいが有るよう
 拜見致して居り升。

白石噺新吉原の所に竹本上總掾に任官して、

「布引瀧の二段目切三人上戸の場を」、

是は義賢館に御座ります。

此おたよりをほち／＼かいて居りました所へ只今十四日出の御尊書着拜見致しました。

まだ御風氣の山、御案じ申上り升、

どうぞ御大切に願上り、

鎌倉三代記の事、丸本が私宅に御座りまして、其の表紙には

鎌倉三代記 豊竹上野少掾

直之正本

前に申上りた如く、此淨瑠璃は只今語つて居り升、

『されば風雅の歌人は』

二度もくりかへしてよみましたが御座りませんで、まるきり品物がちがつて居升。

又、東之元祖の語物の内に

「鎌倉三代記三ノ切」と御座り升、

この三代記の三之切は「鳥追ひ大黒舞」と申所で御座ります。年號は、

享保三戊戌年正月二日。

此時 豊竹上野掾藤原重勝と受領すと御座り升。

又、安永十年辛丑三月廿七日。

江戸淨瑠璃の方の丸本には、

元祖 豊竹肥前掾藤原清正。

(是は江戸開發の御人、前名新太夫)

座本 豊竹東治。

東都江戸橋四日市 石渡和助版

と、しるして御座り升、是に前申述べました太夫役割が書いて御座り升。

是は文樂でも通し狂言でやつて居ります方に御座り升。

又、

初代豊竹氏太夫師は

初代島太夫改め、二世豊竹若太夫師の門人となつて居り升。

「二代目若太夫門弟にして、師匠に付て修業致され明和三丙戌年冬より北堀江市の側にて豊竹座
新芝居興行成つて、(此間多くの役割が御座り升)安永元年より江戸へ赴き彼地にて出勤、天

明二年壬寅十月に道頓堀東の芝居に於て

名代 近松門左衛門。

太夫 豊竹氏太夫。

檜下となりて出勤」と有り升。

旦那様のお詞の通り氏太夫蟻鳳で丸本の裏に役割が出て御座りまするので前便に申上りました次第しかし東元祖の語りました三代記は「されば風雅」ではない事、丸本が御座りますから大丈夫ちがゐます。

明治三十七年頃に出ました本にて、

賛助 竹本攝津大掾
竹本彌太夫

山本九馬亭著

と申す物が六冊御ざりました。

浄瑠璃通解の中に、

源頼家 鎌倉三代記 豊竹肥前掾座
源實朝 豊竹 東治座

「此鎌倉三代記は紀海音作とは異にして作者詳ならず、丸本は十段よりなり、此段は七冊目に入り。文章可なりにして、つまらぬ作者の手になれりとも覺えず、就中此段殊に傑出せり。」
奥書に安永十年丑三月廿七日とあり、海音の死後四十年の作也、と誌して御ざり升。

是を見ますると丸本の通りに相成ます。

元祖の語りました丸本と此の氏太夫役割の丸本とは來月上京のせつ持參致しまして御笑覽を願上
升。

又御本の内に、

一の谷三段目切のはじめの所に「合羽太夫」として御ざります。是も活字の抜けました事と存
じ升。御存じの伊太夫より美濃太夫再改名初代此太夫、後に筑前掾となられました。

「合羽伊太夫」とは商業が合羽屋、名が伊三郎で有つたので通稱になつて居りましたと書て御ざ
ります。

明烏もだいぶん古くより語つて居り升、五行本には

竹本咲太夫

鶴澤 豊吉

と御座り升、且那様の御手元に御座ります番附の内に、たしか咲太夫師の勤めて居られますのが、つたと存じます。……………

第貳信

昨夜は御霊神社の夜店に御座りましたので戻りかけにぶら／＼歩行しました所、箱根霞現の丸本が出て居りました。見ますと表紙の裏に太夫役割が御座りましたゆへ、直様買求め歸宅早々拙宅のと合せて見ますと、私の方には役割が御座りませんので、番附をとり出しくらべ升ると前に御送りいたしました役割と少しちがります所が御座りました。年號は何を見ましても、

享和元年酉八月四日

と誓て御座り升。丸本にも其通りの年號に御ざります。又書下し番附には、

享和元年酉十一月三日より

道頓堀 東芝居。

是を見まするとわづか、八、九、十、十一月、是れだけの間に二度も同じ淨瑠璃を出演いたします事はないと考へます。八月に本をこしらへ、又、太夫も役割をいたしけいこはせしも何か都合有りて前に御送りいたせし太夫とかへて興行いたしました事ではないかと存じます。左の通り丸本役観

大序

一冊目

式太夫

二冊目

鐘太夫

三冊目

菊太夫

美代太夫

四冊目

口紋太夫

津賀太夫

掛久米太夫

合式太夫

綱太夫

奥越太夫

掛美代太夫

合内匠太夫

切紋太夫

五册目

口 是太夫
切 磯太夫

六册目 破れ太夫名不明

七册目

口 久米太夫
中 津賀太夫
切 越太夫

八册目

口 伊織太夫
奥 美代太夫

九册目

口 鐘太夫
切 内匠太夫

十册目

口 津賀太夫
奥 紋太夫

十一册目

口 磯太夫
切 綱太夫

十二册目

總掛合

第十 發足の櫛笄

(竹本女太夫
竹本政太夫)

第十一 合印の忍兜

(竹本島太夫
竹本信濃太夫)

三鼓

鶴澤友治郎

鶴澤 義介

鶴澤 善七

大西 藤藏

是が忠臣藏始めて書下し興行の太夫役割に御座ります。

又此忠臣藏役割は寶曆十三年未正月十八日竹本座に於て二度目に興行せし時の役割

第一鶴ヶ岡

文太夫

第二段目

中太夫

第三段目

口 絹太夫

奥 志賀太夫

第四段目

政太夫

第五段目

志賀太夫

第六段目

口 淀太夫

奥 錦太夫

第七段目

掛合
大和掾 淀太夫
政太夫 絹太夫
中太夫 喜太夫

第八道行

文太夫

第九段目

口 中太夫
口 大和掾

第十段目

口 絹太夫
奥 政太夫
奥 喜太夫

第十一段目

ツレ 文太夫
三味線 野澤喜八郎
鶴澤 文藏
富澤平五郎
富澤善二郎
大西 金二
大西 文吾

此二度目の忠臣藏の時常正月九日竹
田芝居燗焼に付竹本座へ相加り淨瑠
璃操り竹田からくり狂言打込七切追
出し拾文づゝいたし候とかいて御座
い升

忠臣藏六段目もはじめて語られた烏太夫師より、次に語られました錦太夫師の方がよかつたと見
へて高名集には、錦太夫師にかいて御座ります。また今日は箱根靈現の御わびを申上。

二十二日

第 参 信

夫れに鎌倉三代記豊竹麓太夫師の語られました始めての番附ではないかとぞんじますのが見つかりました。

寛政六甲寅年五月六日初日

道頓堀義太夫芝居役割

第一

竹本小野太夫

第二

口 豊竹 巴太夫

中 竹本 加太夫

切 竹本 磯太夫

第三 道行の段

ツレ 豊竹 巴太夫

口 竹本喜代太夫

次 竹本 磯太夫

中 竹本 綱太夫

切 竹本 和太夫

第五

竹本 加太夫

享和二年戊 月目不明

堀江市の側西側芝居。

源實朝 鎌倉三代記 十冊物

源頼家 太夫全部 豊竹姓

久太夫

發端

太序

第貳

第參

第四

第四

坂太夫

久太夫

袖太夫

中口 泉太夫

切 中口 八重太夫

中口 秀太夫

切 中口 巴太夫

切 中口 千賀太夫

坂太夫

是の切狂言に、竹本綱太夫の志渡寺の段が御座ります。

第六

口 竹本 磯太夫
中 竹本 麓太夫

第七

切 竹本 柁太夫
口 竹本 和太夫
奥 豊竹 巴太夫

第八

口 竹本 磯太夫
切 豊竹 麓太夫

第五

切口 泉太夫
啖太夫

第六

口 八重太夫
切 麓太夫

三浦之助母
閑居ノ段

第七

口 千賀太夫
ツレ 姫太夫

第八

晋太夫改 時太夫

第九

切口 坂太夫 姫太夫
口 巴太夫 鳴戸太夫
合ケカ 泉太夫 陣太夫
久秀太夫

第十

三味線 三二

友二

猪藏

東吉

春吉

傳吉

宗吉

此師匠が語られましたして越前風と申事になりましたので御座りませふか。

萬吉

治郎

吉太郎

伊左衛門

松雨齋

改訂正誤表

9	7	2	4	3	1	13	6	5	7	3	頁
(天明五)	駒太夫門弟	(19)番	(享延)	越前少掾 地色	「文章を」	竹本政太夫	竹本若太夫	「東の元祖」	改善	攻究	行

誤

(寶曆四)	政太夫の門弟	(延享)	播磨少掾 地色	「文章を」	若竹政太夫	豊竹若太夫	「西の元祖」	改善	研究	
-------	--------	------	------------	-------	-------	-------	--------	----	----	--

正

目次

三三	三一	三〇	二四	二三	八	四	三	16	16	15	11	8 9
								4	2	2	7	
上之卷挿入	二段目中挿入	十段目切挿入	双蝶々曲輪日記 橋本の段	田村麿鈴鹿合戦 阿漕浦平治 住家の段	堀川夜討	天の網鳥時雨の炬燵茶屋場の段	寛恕	偶居	鹽町	投じ	(14)、 (15)、 (16)、 (17)、 (18)、 を	
		六册目切挿入	四之切挿入	御所櫻堀川夜討	増補を挿入	心中紙屋治兵衛 上の巻 茶屋場の段	寛恕	僑居	鹽町	投じ	(15)、 (16)、 (17)、 (18)、 (19)	と順次番號をおくる。

本文

四五 四六 四七 四九 五三 五七 五九 六二 六九 11 4

見出

11

稻川住家の段

染模襷妹脊門松

傾城阿波鳴戸

近江源氏

竹に雀の段

傾城冥途飛脚

本文中「新町」とあるは

本文中「フシハル」とあるは

云へぬが

天の網鳥時雨の炬燵 茶屋場の段

稻川内の段

下の巻挿入

八ツ目切挿入

近江源氏先陣館

御殿の段

戀飛脚大和往來

下の巻挿入

六ツ目切挿入

下の巻挿入

「清水町」

「ハルフシ」と、

云へぬが

心中紙屋治兵衛

上の巻 茶屋場の段

28 26 24 21 20 20 18 ' 16 ' 15 14 13

6 8 2 4 10 見出 13 10 9 7 5 6 8

射殺さるゝ覺悟をして
 新町
 宗介
 ノ
 古昔
 兜
 襟に
 師匠
 書いた夫を
 おはぐろ
 様にと
 六ヶ敷い
 薄情物

射殺さるゝを覺悟して
 清水町……以下之に倣ふ
 宗輔
 ノ削除
 むかし
 兜
 襟が
 先輩
 書いた物
 かね
 様にも
 六ヶ敷う
 薄情者

74 73 61 60 56 45 ' 42 34 34 33 32 31

9	2	9	4	1	6	8	2	7	見出	6	13	3 4
誰が	竹本筑前掾	祖母は六十の水汲は	右石之舞	百八十六年	巨擘	が「二」	鳴太夫	三郎	堀川夜討	ではなければ	の次に	餘り

たが	豊竹筑前掾	祖母は六十のみつハくむ	友石の舞	百八十六年前	きよはく	が「二」	島太夫	寛三郎	御所櫻堀川夜討	でなければ	の前に	あんまり
----	-------	-------------	------	--------	------	------	-----	-----	---------	-------	-----	------

99 96 92 89 85 81 80 79 78 76 ' ' 75

5	5	6	見出し 3	3	5	6	3	3	13	13	6	1
侍二人	れるやうに	御覽	石碑	完璧	駕籠を	「中」にさへ	指道	スワ町平衛門	味ふは	ならぬ	褒美	音

侍二人	れぬやうに	御覽	いしぶみ	完璧	駕籠	「中」に	斯道	周防町平右衛門	味は	ならぬ	褒美	おと
-----	-------	----	------	----	----	------	----	---------	----	-----	----	----

9	5	7	2	6	5	見出し	9	2	13	9	5	3
夫は俺は	十年	竹本生駒太夫	合羽太夫	「こりや……」	「ヤアござらふとおつしやるは」	道春	汗を	上ギン	「某元は源氏の家臣」	鳥羽の離宮	竹本古靱太夫	大隅掾

俺は彼が	廿年	豊竹生駒太夫	合羽伊太夫	「ソリヤ……」	「ヤアござらふとおつしやるか」	みちはる	汗を	上ギン	「某元は……」	鳥羽の離宮	豊竹古靱太夫	大隅掾
------	----	--------	-------	---------	-----------------	------	----	-----	---------	-------	--------	-----

9	見出し 三段目切	11	坂納	6	竹本古靱太夫	6	勢力	1	竹本座云々	8	畜生	8	論旨	7	鎌杖	見出し 安達ケ原	8	ドンナわかつた	9	離れ恋	5	森口源左右衛門
	『月洩る臥戸に入る月の』																					

	四段目切		坂能		豊竹古靱太夫		藝力		竹田因幡掾座に上場した筈		畜生		論旨		謙杖		奥州安達ケ原		ドンナわかつた		離れ業		森口源太左衛門
	『ふし戸へ行水の』																						

見出し	2	見出し	3	2	9	1	9	4	見出し	9	11	10
傾城阿波鳴戸	菅 <small>くさかん</small>	見出し	「酒は松ばへ」	「羽織脇差衣まわし」	中居	聞かれる	ヤアく土俵入り	綱太夫を	稲川住家の段	新左右衛門	「渡り頼まん船人」	九年目

「八ツ目切」挿入	菅 <small>くさかん</small>	「下の巻」挿入	「酒は杉ばへ」	「羽織脇差とりまわし」	仲居	聞かれる	モウシノ土俵入り	綱太夫と	稲川内の段	新左右衛門	「船人に渡り頼まん」	五年目
----------	-----------------------	---------	---------	-------------	----	------	----------	------	-------	-------	------------	-----

274 263 250 257 255 254 253 252 249 248 237 226

見出し	4	6	見出し	3	3	5	4	7	3	6	見出し	12
櫻鉦恨絞銷	走り入	グツト……	竹に雀	滴身	「フシ」	芝六の段	竹雀	鶏澤叫	「地フレハル」	筑毬	近江源氏	矢筈敷

櫻鉦恨絞銷	走り入	グツト……	御殿	満身	フシに	芝六の内	御殿	綱造の誤りに非ざるか?	「地ハルフシ」	筑前	近江源氏先陣館	矢筈敷
-------	-----	-------	----	----	-----	------	----	-------------	---------	----	---------	-----

341 ' 340 337 324 316 304 291 282 ' 280 279 275

7	6	見出し	1	1	'	'	見出し	見出し	8	4	11	2
音を	竹本古鞆太夫	見出し 寫本	近松徳藏	三人上戸	から	伊賀越道中双六	戀娘昔八丈	傾城戀飛脚大和往來	落各	六ヶ敷	もで良い	ならだ

音と	豊竹古鞆太夫	きゝがき	近松徳叟	義賢館	めいほく	六ツ目切……挿入	下の巻……挿入	傾城……削除 下の巻 挿入	落合	六ヶ敷	でも良い	ならば
----	--------	------	------	-----	------	----------	---------	---------------	----	-----	------	-----

3	9	9	1 3	5	2	11	2	9	3	5	3	8
察し	「ハルフシ」を	三代目吉兵衛	名霧	昇 <small>あが</small> 込 <small>こ</small> む	解 <small>あ</small> つ <small>と</small> なら	心持にはつて	色香も	程をや春の名残なるらんとの歌	霜 <small>しも</small> ふ	ならねば	「チヨンく」	願 <small>ねが</small> ふ
案し	「ハルフシ」に	?	夕霧	かきこむ	解つたら	心持になつて	色香も	程とや春の名残りとはとの文句	震 <small>ふる</small> ふ	ならねば	削除	願 <small>ねが</small> い <small>ふ</small>

414 410 ' 409 406 405 403 402 401 ' 396 391

5	8	4	3	9	10	見出し 出達	2	12	11	10	'
「一」	逸ふ	三ツ目の口……綱太夫である。	座元、吉田芳松太夫、豊竹麓太夫	云へぬはい	『野山ア——アア——モ』		ナアクウナアアクウ	堪能	相承	委敷 <small>よかし</small>	四代目綱太夫
削除	逸ふの	削除	座元吉田芳松、太夫豊竹麓太夫、	云へぬわい	『野やア——まア——モ』	出立	ナアクウナアクウ	堪能	拜承	委敷 <small>よかし</small>	六代目綱太夫